

岡致遜
氏譯 梵文和譯法華經

梵語佛典の翻譯が、例ひ正しくは印度所傳の梵文によるに、その原型の變へらるゝと比較的少き遠き時代に不惜身命の求道心と、異國語に對する豐膺なる熟達力とを以て翻譯せられ従つて其當時の原型に於て規定せられたる漢藏譯等の諸佛典と、又同じく古き時代に於て原本のまゝ異域に流傳し、傳寫されたるものゝ今日發掘せらるゝ古き零本、斷片等とによりて嚴密に比較對校して、古典の原型に妥當なるものによつて到達する道を通過せないものならば、又例ひ少くその根基の上に立つものであつても、その翻譯以前のテキスト・トロジャーに少しでも嚴密性を缺如するが如きものならば其價值たるや單に派生的であり、學徒の片手間に漢譯佛典の荷に延書せられた所謂「國譯大藏經」も、價值に於て何れが優れるであらうか。

南條・泉兩先生が、ケルン・函條本によりて「新譯法

華經」を出されてから早くも十年を経過し、其間我日本に於ける佛教學の進歩、殊に印度諸原語學が長足の進歩を遂げたところは近時相續いて刊行せらるゝ出版物の上に著るしく見らるゝ所であるが、正に此當時に當り、日蓮宗の學匠岡氏によりて、自宗所依の根本聖典たる本經が譯者半生の努力によりて譯せられたことは誠に佛教學界の慶事たらねばならぬ。其原典は固りケルン・函條本にも由られたことであらうが、特に河口慧海氏將來の優秀なりと稱せらるゝ印度古貝葉原本に依り、殊に斯界の畏敬すべき先輩、高楠・荻原兩博士の嚴正緻密の證義と、將又西藏語大學匠河口慧海氏の西藏譯對校の補削とによりて、實に渡邊海旭氏の譚嘆措く能はざるものあるのであるから、是れ誠に吾人の期待して止まない眞の意味に於ける梵文和譯法華經たらねばならない。

その譯文について見るも、ピュルヌフ、ケルンの諸先輩すら其翻譯に際し尙且夥多の難點を残したる梵文偈頌の、padaの長短種々なるものを一様になだからかな七五調に譯出せられたなき到底容易な業でない。而も

かくするこゝによりて若し梵文偈頌の當意を托け或は損ずる様のこと、なれば、漢譯の傳へ得ざりし梵文の委曲を傳ふべく切角企てられた難業の成績は毀損されるけれども、「緣起序」に云はるゝ如き譯者の努力は能く敢えて此が完きを得たことであらう。

解し難き直譯嗅味の脱化に力め、欄外には内容に互りての懇切なる檢標、梵・藏・漢諸本と本譯文との間の諸本對校上の成績、或は又其他諸種の註釋を付したるなき、總じて渡邊氏の言はるゝ如く「兒如」雖も此が通解に苦しまず、老學者も裨補する所」多大なるは本書の價値であらう。

吾人は法華經原本の專攻者でなく、又譯者の特に依用せられたる如き優秀なる原本を参照する機會と餘裕とを有たないものであるから、本譯書の原本に對して全般に互りての成績を云爲することは能ないのであるけれども、吾人が少しくケルン・兩條本を中心として本經に參見した經驗に由りて、序品と見塔品との或部分の偈中特に著るしく氣付いた諸點について本譯書の成績を少しく述べやう。尤も吾人の所論は主としてケル

ン・兩條本を原典としたのこゝであるから、吾人の認めで少しく疑はしく思はれる諸點でも、譯者の依用せられた原典からしては必然的な妥當性を有するものであるかも知れないけれども。

(1) 先づ序品の第四偈に「光は市街を示しつゝ、萬八千の東の地」があるは *sa caiva raqmi purimadigya asitadacaksensahasrapurāḥ* であらうが、此に相當する西藏譯は 「*br-dzer de-yis gr-évi phyogslog-s-kyi || shin-ni ston phrag bu bryad tshad-pa namas*」、彼光によりて東の方の萬八千に滿つる諸國土」であり、妙法華經には「照于東方萬八千土」を云ひ、正法華經には「照照東方、萬八千土」を云ひて「光は市街を示しつゝ」に相當するものに見當らない。怖らく譯者は *purimadigya* を以て *purim* を業格、*adigya* を動詞の *sevad* に見て市街を示しつゝを譯されたのであらうが、*purimā digya* は巴利語の *The East* の意味なること、チルダースの巴利辭典に示さるゝ如くであるから、此を「市街を示しつゝ」は云何なものであらうか。又譯者は「萬八千の東の地」を云はるゝが *purimadigya* を除きて「東」な

る語は何處にも存せない。而も「東」を云はるゝのは云何なる語の存する爲なのであらうか。漢譯二本に東方にあるから東とせられたるが如きは固り有るまじきことであらうが、爾らば此はケルン・兩條本に *purāṅa* であるのが、譯者依用の原本には *puras* となつて居るのであらう。而も *apūmā* は西藏譯に云ふ *tshad-pa* であつて満數を示す語であるから、かくも見られない。それらは英譯寧ろ佛譯の明確に示す所である。

(2) 第五偈の「此處に死しては亦生る、されば六趣に分るなり」は *satsā gatsā tahi vidyamānā cyavanti ye 'py upapadyata tatra* であるが此が 西藏譯は *ngro-ba drug-po de-na yod-pa nams* 即ち *gai-dag der yan gi lpho skye-ba nams* 、「彼六趣に在者等及び其處に死し移り、生ずる者等」であるから「彼國々の生類」を説明して、正しく六趣に在る者、六趣に於て死し生ずるものとの二者を言はんことをしなければならぬ。これによりて梵頌 *Gay* の意味明瞭となるのである。譯者は梵頌の *tahi* (ネパール本) を棄て、カシユガル本の *tahi* を取り、*tahi* に力を入れて「されば」を言はれた

のであらうが、西藏譯に *de-na* があるより見れば寧ろ、*tahi* であり、カシユガル本の *tahi* は *tahim* (= *there adv.* Childers) の誤であることが知らるゝ。因みに言ふまでもなく *ye* 即ち *gai-dag* は第六偈の *tesam* に關係するのである。

(3) 第七偈「聲高低に譬喩して」は *puḍharanto ma dhvas varāṅh girāṅh* であつて、西藏譯は「*śān-pāṅi sgra daiṅ dhyans-su ssaṅ-ba-deg*」美しき聲(語)の音を語りつゝあることがあり、羅什は「其聲清淨、出柔軟音」と譯して居るから「譬喩」なる語は何れに求むべきか。尤も「*dāhārah*」は *an example* の意味有ることがアブテも此を指示しては居るが、西藏譯及び羅什譯の指示する以外に、此場合に此を「譬喩」と譯すべき理由が有るのであらうか。

(4) 第八偈「深大不思議の音聲を各自の國は高調して」譯せられたるも訝し。 *muḍcanti ksetresu svakṣvakeṣu* の句は「*so-soli śhīṅ nams-su yan rab-tu lbyin*」の西藏譯の如く「(聲を)各自の國に放つ」と云ふが普通の讀方であつて、竺法護も「各各自捨境界所有」と譯して居る。

(5) 第九偈「生類は苦に惱み、生老死苦を喚ぶ愚者、

僧は是れ苦の終息なり云々の「年老死苦を喚ぶ愚者」
āṭṭārākh inamanta ajānākaḥ | 中 *khinamāna* の西藏語
kyid-kyo であり、即羅什の所謂「厭」であるから、「喚
 び」の強ひて譯すもか理由はなからう。又 *duḥkhasya*
anto ayu bhikṣaveṭi を「僧は是れ苦の終息なり」の譯
 されたが、竺法護が「比丘當知」の譯したるは *bhikṣava* を
 譯者の如く主格に見ず、明かに「vocative case」見たもの
 である。爾か見るこゝによりて「比丘よ、此は苦の終
 息なり」と、彼に寂靜涅槃を説くこと、意味は明確な
 なり、「此は」は適確に次に來る寂靜涅槃を示すものな
 るのである。

(6) 第十四偈、第十七偈の第四句に「云何なる財をも
 施せり」の云ふ、「云何なる」は怖らく *ke cit* を示す
 ものであらうが、*ke cit* は此處にては何れも西藏譯に
la-ta 或は *le-las* ありて「或者は」の意味なること勿論に
 して、漢譯には時に「或有菩薩」も譯して居る。此が
 従つて「云何なる財をも」なる譯されたのであらう
 か。

(7) 第二十二偈に於「*bhikṣuṃ samānaḥ*」を譯して「僧の如

く」の云ふ、*samānaḥ* は「如く」の意味存せざるにはあ
 らざれど、西藏語は「*dge-slon gyur-cin*」；比丘のなりつ
 べの云ひ、羅什譯又「而作比丘」の云ふ。蓋し兩譯の
 指示する處正當なのであらう。英・佛譯者も共に此に
 は氣付いて居らない。因みに *samāna* は巴利語に於ける
as の現在詞の一であつて *Divyāvadāna* p. 6516 にも其
 例はある。

(8) 第四十八偈「華美なる天に此界の、限り知られぬ人
 々を、總て居ながら我は見る」の梵頌、*aham vimāṇ ca*
balhaprāṇakotya iha sṭhīṭh paḡyīṣu sarvam etat | prapupṭam
lokam imam sadevakam……の中、「華美なる天」此
 界の「は云何に讀まれたものであらうか、*prapupṭita*
 「花咲きたる」を甚しく意譯して華美なるとするも、此
 の *lokam imam* を屬格に解して畢つては云何にこつ
 可能なのであらうか。今西藏譯「よるべ」| *ḥar-bas ḥjig*
-ren ḥdi-dag rab-rgyas-pa | | dag dan srog-chags bye-pa
maḥ-po ḥdis | | ḥdi-na ḥding-bshin de dag thams-cad mtshon
 一 つあるから梵頌の *vimāṇ ca* があるのは、カシユガ
 ル本の如く *ime ca* があるべしであらう。かくして此一

偈は「勝者此一光を放ちたるによりて」天ミ俱なる此世界は花咲けり。我ミ此多くの生類ミは、此處に居ながらにしてその凡て(花咲ける天ミ俱なる世界)を見る「譯するべきでないか。而して此れ實に羅什が、其華開敷、佛放一光、我及衆會、見此國界」ミ譯せるものニ正に一致する。

(9) 第五十偈の終「切なる解願疑指導せよ」は原本の *kāntūhalāni hy apānaya buddhapura* じみらんが、*apāni* は「指導する」の意味よりも寧ろ「連れ去る、取り去る」の意味であるから、此を「除去」するの意味に取り、従つて、*kāntūhala* = desire; curiosity の意味をも西藏譯の如く *the-som gyur-pa sol* | 「疑を除け」*ツツベクヂミラン*。羅什亦「佛子文殊、願決衆疑」*ツツベクヂミラン* ではないか。

(10) 第五二偈の終に「其智慧は無垢清淨」*ツツベクヂミラン*。無垢清淨ならば *vimālāni viṅuddham* ツツベクヂミランがあるべきであるが、ケルン・南條本の第五二偈には *vipulāni viṅuddham* ツツベクヂミランがあるから廣大清淨でなければならぬ。蓋し此は譯者が河口師將來の貝葉本にでも *vimāla* ツツ有つたのに由られ

たものであらうと信ずる。西藏本ミ漢譯二本には共に此所缺くるを以て、否梵文五一—五三偈までは藏漢の諸本ミ其形異なるを以て *vipulā*; *vimāla* 何れであるかを決し得ざるを遺憾に思ふ。

因みに梵文五一—五三偈を西藏譯に於て之を求むるに、

51) | *ḥkhor bshī ḥdi-dag rab-tu dgañ sems-kyis* |
 | *dpañ-po khyod dan btag-la mñor-par lta* |
 | *bde-bar gcegs-pas de-ruñ ci-yi-phyir* |
 | *snan-ba ḥdi-ḥdra ḥdi-ni rab-tu bran* |
 52) | *bde gcegs-sras-po khyod-kyi(S)ñ-ston-la* |
 | *dgañ-ba skyed-cin the-tshom man-par sol* |
 | *ḥdi-ltar hod-zer rgya-chen rab-gran-ba* |
 | *de-dag ci-ḥdrañi don-du ḥgyur-ba-shig* |

此等四衆は歡喜の心もて

勇者よ、仁者ミ我ミを見る、

善逝は今日何故に

此かくの如き光を放ち給ひしか。(51)

善逝の子よ、仁者驗記せよ、

歡喜を生じ、疑を除却せよ

かく廣大の光の放たれたる

それらは云何なる利益なるべきか(52)

西藏譯に於ては第五一・第五二の偈に盡き、夫故に西藏譯にては此處の偈數五、五偈である。而して羅什譯も

四衆欣仰 瞻三仁及我 世尊何故 放此光明。

佛子時答 決疑令喜 何所饒益 演斯光明。

竺法護譯曰

於四部衆 心懷悅豫 渴仰仁者 兼見瞻察

今日安住 何所因由 奮大光明 而從口出。

解散經疑 勸發欣躍 何故佛現 無極大光

如斯所變 當有所感。

かく西藏譯と合するものであるから、是正に少くも西藏譯以前に於ける法華經の原型たりしを疑はない。夫故に現存梵文の第五二偈終二句と第五三偈の初二句とは此原型以後に加へられたるものであり、第五一の初二句と第五二のそれとが此原型の第五一となり、第五一の終二句と第五三の終二句とが原型の第五二たるは勿論であるが、第五三の終二句中、*caṅḍiḥo*は西藏文の如くんば*kiṅḍiḥo*つてもあるべき所であり、*yomaṣa*も亦

普通の梵語ならば*pad evam*つてもありたい所か。

(11) 梵文第五六偈 *pricchati mātreya jñāya putra sprīhenti*

te namamāru yakṣarāksaṣū | catvarīmā parā uḍḍikamāṇā mañjuśvarāḥ kiṃ nva vyākāryati || (相當する譯「(我)佛子彌勒は(此處に)問ふ、(彼)人天鬼神も願有り、四種の會衆も待ちわびぬ等」云ふてあるが、西藏譯には

「*rgyal-bahi sras-la byams-pas kun-'tris-nas | lha mi gnod-sbyin srin-po de-dag dg-ñ | ……* 慈氏は勝者の子に問

ひて、彼等天・人・夜叉・羅刹は悦ぶ——」こあるから、佛子は彌勒ではなくして文殊であり、彌勒が文殊に問ふ

「問」の全體が此五十五行の偈なのであるから、其終結の偈に來りて、彌勒が佛子文殊に問ふことを總括して「彌勒が佛子に問ふ」云ふことは偈前の文章に照應

せしめて明確に知らるゝことであらう。實に「人天龍神四衆の代表者として、彌勒が文殊に質問した時、

彼等四衆は、今文殊が此處に何を驗記するであらうか

と期待しつゝ、悦豫した」云ふのが、此の梵文第五六偈の意味である。因みに *mañjuśvarāḥ kiṃ nvaḥa vyāk*

ansyati の句、羅什譯に文殊當知——爲説何等こある

は、怖らく其原本が文殊を呼格に *kin* を *kinoid* の不定代名詞に、*vyākarisyati* なる未來詞を命令詞に作られたるによるのであらうか。正法華經に「今者溥首、惟具分別」ごあるもまた同じく、西藏譯が「*ñim-dbyans l-dhr-ti ci-shig juñ-ston ces*」ご云へるも此二漢譯に相當するものである。是れ亦西藏譯以前の原本の一致する點なのであらうか。

見塔品の偈について少しく云はん

(1) 第七偈に「かくの如きは我が願」ご云ふ。是れ梵文の *utsukati* ごよりて「願」ご譯されたのであるが、西藏譯は「*de-la-dur-ni na yan gin-tu brtson* ; 又かくの如き、*ni* に我は勤む」であるから、「*utsahata* = 勤」の方が有力である。吾人はビルヌフが「*tous mes efforts*」ご *utsahata* の方を取られた識見に畏敬する。

(2) 第一一偈「佛陀なる多寶牟尼尊は、獅子吼し給ふを聞かんごて、其爲勤め尋ねらる」ごは、多寶佛が勤め尋ねられる意であらうが、西藏文にも「*ñi-dla spro-ba su byed-ta || de-ri sen-gelji sgra gsan-to ;* 此處に勤を作す

所の彼人の獅子の聲を聞き給ふ」ごあるのであるから、*siñha nādani grupe tasya vyavasthāyāni karoti yāñ ||* の句を譯者の如く何うして讀み得たのであらうか。

(3) 同じく第一二偈に就いても譯者は「我も亦此第二者なり、來集せる多億の導師等の、勝者子等よ我も尋ね聽かん、勤めて此法宣傳すべし」ご譯して居らるゝが、原文に *buḥavo imo ca ye koḥyo āgata ʾnyānān* を *mūyākā nān* の複數屬格ご同格に見做されたるごつ、又原文の *ca* を無視せられたるごつ、及び後二句の *vyavasthāya groyāni jinasya putrāt yo utsahe dharmam imāni prakāṣitūn* に於て、*yo* を願られなかつたごつなごが、かゝる譯を出されたる所以であらうか。今吾人が西藏譯を見るに「*|| gñis-pa na dan ḥdren-pa (pañi?) bye-pa phrag || | mañ-po gañ-dag lhags-pa ḥdi-tag kyāñ || | gañ mams chos ḥdi byad-par spro-ba-ʾji || | rgyal-bahi sras-kyi brtson-pa ḥan-par byed ||*」あるから、此によりて吾人は梵文後二句中の *groyāni jinasya putrāt* をカミガル本の如く *groyānāni* *instamajnanāni* に見て「第二者なる我ご、導師の來集したる此等幾億のものごは、此法を説かんご勤むる勝者子

的格に見るは、西藏譯と同じく *tena* を後二句の初にある *yañ* を受くるものに見るのであつて、寧ろ其所見の妥當なるを思ふ。羅什のそれを取るべきか、西藏、正法華のそれに依るべきか、諸先進の御指教に接し度い。

(5) 次ぎに第十四偈、*ime ca ye āgata lokanātha vicīrīṭhā yātr iya gobhīṭhā bhūḥ | eśān pi puṇya vipulā analpaka kriṭhā bhavet sūtraprakāṣanena ||* を「又世界導師等集りて、種々なる莊嚴を彼等爲す、是此經典を説くが故、其等廣大なる供養せらる」に譯された。「彼等〔が〕爲す」に云ふ「其、彼等」を後二句の中に持ち行きて、「彼等」に廣大なる供養が作さるべきである」に譯した方が意味が明瞭になる。従つて「其等廣大なる」に云はれた「其等」は無要である。又 *ya*……*bhūḥ* の譯が施されてないのは七五調構成の爲に省略せられたのであらうけれど、羅什も爲是經一故、亦復供養諸來化佛、莊嚴光飾諸界、一者上 *ya bhūḥ* の譯を示したところであるから、此の無いのも云何々。西藏譯に *mdo-sde rab-tu bstan-pas hjiḡ-rtan mgon | | gañ hdi lhags-par gyur-cin gañ-dag-gis | | sa hd bkri mdses byas-pa de kñi-a | | mchod-pa rgya-che*

ni-ohuñ byas-par hgyur | : 來集し、又此地を種々に嚴飾したる彼等世界主に、契經の説示の故に廣大多數の供養は作さるべきなり」に云ふ。因みに此處にもビュルヌフの佛譯が、英譯のそれに優れたところを一言しておく。

(6) 第二五偈の譯「开は爲るべく難からず、是又勇者の難事ならず、故に此難事爲しつゝも、有らゆる世間に最上ならじ」の中、「是又勇者の難事ならず」の梵文 *ca vīrya sya tattakam* をブーサン氏校訂のカシユガル本の文々比較研究の上、此れが西藏譯なる「*Drison-hgrus-dag kyan de-t-sam med*」及正本の「精進無奇」特に對校して、*lempoi de la force nest rien* なる佛譯が妥當なるものであることは「宗教研究」に本田義英氏が論ぜられることになつて居るから、此處に再説するところを省く。「有ゆる世間に最上ならじ」は *sarvalokasyāhgratah* を正本の「不如於來世」に結び付て譯されたのかも思はれるが、此は西藏譯に「*jiḡ-rtan kun-gyi mdun-du hdiñ |* 此處に、凡この世間の面前に」がある如く、ビュルヌフの所謂 *en présence de tous les mondes* であるから、和譯

者がかく譯せられたるは云何なる根基に依るのであらうか。此偈の英譯は殆ど無意味であるが、西藏譯及び佛譯によりて此を譯すれば「此處に凡ゆる世間の面前にて、此難事を作したりとも、而も彼れ難事を作すにあらざるべし。精進も亦爾尙の價值無しの義なるのである。

(7) 第二七偈の約二句「乾草擔ひ過ぎ行きて、燒けずとも是難からず」ニ云ふ、「燒けず」はブーサン氏校訂中亞本の *adalyantis* (ミ擔草不燒) (正法華)、入中不燒(妙法華)に由りたるものであらうが、ケルン・南條本は *dalyantas* であり西藏本はケルン・南條本即ネパール本ミ系統を同じくするものである。曰く *bskal-pas bsteg-par ni gan-shig* | *rtsva-yi kur-bu thogs-nas-su* | *tshig-bshin-pu-ni dbus hgro-ba* | *ljig-rtan hdi-ni* (Ca) *de mi dkañ* | 劫火によりて燒けつゝある時に、若し人有りて、草の擔を荷負して燒かれながら〔劫火によりて燒けつゝある〕中に行かんも、此世間に於て、それは難事にあらず」ミ。怖らく西藏本翻譯當時の西藏譯の依用したる原本は、既にネパール本ミ相近く *adalyant*

の否定詞を失つて居たものであらう。英譯は拙きながらもネパール本の傳へ、此處にも正確なる佛譯者は *sans tse brtle* して古形に由つたミである。

(8) 第三〇偈 *na hy etain dugkarani bhotti tasmim karasmin bhikṣuṅgam* | *vinyec chrāvakanamalyani paṭṭabhijāsu śtāp ayet* 二を「其時僧等を導きて、(今)我が聲聞のその如く五神通を得せしむる、是難しき事ならず」ミ譯されたのは佛・英譯者と共に *bhikṣuṅgam* を *accusative* に見たものであらうが、正法華經の「比丘於彼世、開化諸聲聞、住於神通者、不足爲奇異」にては比丘は *accusative* でない而して西藏譯が *[de-tshe gan-shig dge-slon rams]* | *hdul byed nā-yi ḥm-thos mams* | *mion-par ges la bkod-pa yan* | *de-ni dkañ-ba mb yinno* | 爾時諸比丘が化導する〔所の〕我聲聞を神通に在らしめたりシム、それは難事にあらず」ミ譯したのはブーサン氏校訂に見ゆる中亞本の西藏的な譯し方であるが、その *gan-shig* なる關係代名詞は明らかに中亞本に見ゆる *yaṅcābhijāsu* の *ya* を示すものであるから、ネパール本の *paṭṭabhijāsu* の原形は *yaṅcābhijāsu* なるミ疑無く、夫故に本偈は「爾時若し

比丘有りて我聲聞を化導せん、又神通に住せしめん、
〔而も彼〕比丘等には彼難事有るにあらず」の義なる
や疑ない。

(9) 第三二偈「*kośaśāstrāmbhavāṅ arhate yo 'pi śāpayet*
śaśabhidāmah bhūgin yathā gangyā valikāṅ」を「恒河
の砂の数の如、千億なる多き諸人を大なる威力ある六
神通の、阿羅漢たらしむる人あるも」に譯された點は
英譯よりも勝れて居るが、「大なる威力ある」は *mah*
bhaga にあらう、爾ら *bhaga* は固り菩提分なき云ふ
時の分、分配等の意味であるが、此を「威力」に云ふは
譯者自らの特に意味せらるゝものを以てかく穿ちたる
義譯させられたるか、或は譯者依用本にて威力に相當
する語があつたので、それを以てケルン・南條本を訂正
したものであらうか。前者ならば第三者の計り知るべ
き所でないが、後者ならば、該「威力」に相當する語が、
中亞本 (*Chag*) 及び西藏本 (*tal*) を否定する丈の有力
なるものでなければ不都合を來すであらう。又「威力
ある六神通の阿羅漢」に「六神通の」を阿羅漢の形容句
と見ることはネバルノ本の *te* (|| *te*) 及びブーサン氏

中亞本の *te*、并びに羅什譯に「令下千萬億、無量無數、
恒沙衆生、得阿羅漢」具中六神通とあるを無視せら
れたものであらう。實に此は羅什譯の如く、又西藏譯
lmon-ges drug-dan skal chen dan | *l-gye-dcom-rid-la*
rgod-pa bus (?) の如く「六神通の阿羅漢果 (arhata) の
に在らしむる」ものであらねばならぬ。尙佛譯者は *les*
six connaissances surnaturelles et les grands perfection の
śaśabhidā mahābhaga を分けて居らるるが、それ
ならば西藏譯「*lmon-ges drug dan*」の「*dan*」であ
るべきであるから、此は分けずに「六神通を具する大
分」に見るべきであらう。

上來吾人の述べ來れる諸項は本和譯の極めて一斑に
就てのみであり、又繰返へし云ふ如く吾人は譯者の
用ひられた優秀なる原本を見ないものではあるけれ
ども、漢藏の諸譯によりて仔細に攻究した結果は、本
譯によりて法華經の原型が云何程まで物語られんまし
たかの趨勢は略密知し得るのではないだらうか。譯者
は其緣起序に云はるゝ通り本譯に對して非常な努力を

拂はれたのであらうが、藏譯や漢譯等の對校上の檢繋一言にして云へば總じてテキストロジカルな攻究により多くの力を盡されたかつた。漢譯者の明に指示した極めて見易き點なきの見落しから奇異な譯文の生れたことなきは、切角の聖き企てにも副はず誠に遺憾に堪へ得ない。又渡邊氏は其序に於て、佛譯が早き時代に出でたるを以て、英譯に及ばざるやのこゝを述べて居らるゝが、上來の處々にも一瞥した如く吾人の乏しき經驗の證する處は寧ろ其正反對であることを終に一言しておく。(山口益)

○忍性菩薩良觀年譜補遺

永仁六年の條に左記の事項を加へる。

八日鑒眞和尚東征傳繪緣起五卷を唐招提寺施入した。現に同緣起を唐招提寺に藏し、近くは大日本佛教全書遊方傳叢書第四に收めるところであるが、該叢書編者の附言によれば「各卷與書は忍性施入當時のものなりや否尙

攷究の餘地あるべしと云ふ」。然し何れにしても、施入の事實は確かに認めねばならぬ。同緣起の畫工は六郎兵衛入道蓮行であるが、詞書の筆者は各卷異つてゐる。但し第二卷には何とも記載がないので明かでないが、第一卷は美作前司宣方、第三卷は大炊助入道見性、第四卷は足利伊豫守後室、第五卷は島田民部大夫行兼の筆に成るといふ。施入者の署名には極樂寺住持沙門忍性となつてゐるが詞書の作者も忍性と考へられる。佛教全書も忍性の作として居る。忍性がわが國律宗史上の一大先德たる鑒眞の傳を編んだといふことは、尤もなことと思はれる。

なほ粗漏な年譜に就いて補正すべきことが少くないであらうから、大方の示教を仰いで完成を期したいと思ふ。